

書評

龜井 孝著『Chinese Borrowings in

Prehistoric Japanese

(吉川弘文館刊、昭和二十九年十二月)

河野 六郎

著者とは幼少からの友人で、絶えず學問上少からぬ恩恵を受けてゐる筆者は著者の精緻なる頭腦と該博なる知識には日頃深い尊敬を感じてゐるので、國語學には素人の筆者などは到底批評する柄ではない。そこで一應お断りしたのであるが、西、増淵兩氏の懇請によつて已むなくお受けして了つた。勿論批評でなくとも紹介で宜しいといふことであつたからである。その紹介も恐らくビントの外れたもので、著者には迷惑かも知れない。たゞ著者の扱つた問題には多大な興味を感じるので、自分なりに本書を眺めてみたいと思ふのである。

表題を邦譯すれば、「先史日本語に於ける中國語からの借用語」とでもなるのであらうか。この様な題目は恐らく何か突飛なもの、悪くいへば奇を好んでゐると一部の國語學者には感ぜられるであらう。それほどこの主題は正統的な國語學の關心か

ら遠いものである。にも拘らず最も正統的な國語學者を以て自他共に許す著者がこの問題と正面に取組んだところにいかにも著者らしい所が現れてゐるのであるが、この論文はそれが英文で綴られたことと共に單に我が國の國語學界といふ狭い範圍に向つてでなく、廣く世界の言語學者に對して「借用」といふ言語現象を從來以上に注意を喚起すべきことを主張するのが視ひなのである。

しかしこの著作は我が國の學界の潮流から孤立したものではない。終戦後あまり目立たないが、我々の母國語の起源に對する關心が専門家の間にかなり根強く潜んでゐる。日本言語學會の機關誌「言語研究」の最近號(第二十六・二十七號)を見ても、服部四郎博士の論文「言語年代學即ち語彙統計學の方法について——日本語の年代」は米國の Swadesh 等によつて最近提唱されてゐる言語年代學(Glottochronology)の方法の日本語への適用を試みたものであつて、日本語の起源といふ問題を全く新しい角度から考へようとされた研究である。これだけでも専門家がこの問題をいかに眞誠に考へてゐるかが判るのである。本書は直接日本語の起源を論じたものではないが、究極に於ては日本語の比較言語學的研究の準備作業として先史日本語に於ける借用を考へたものである。

さて、本書は序論一節と本論五節から成り、本論の五節が結論をなしてゐる。

先ず序論の冒頭に先史日本語には中國語の借用は民衆語

(popular speech) としては殆ど起らなかった」といふ否定的結論が述べられる (p. ix)。そしてこの問題を解決するには二つの approach がある。一は言語學的な approach であり、他は文化史乃至社會史のそれである (p. ix)。歴史的には中國語からの借用が期待されても實際にはそれが起らなかったのは中國語と日本語との構造上の incompatibility に歸せらるべきである (p. ix)。従来「借用」は之を獨立の言語學的な問題としては殆ど扱はれなかつたことに對し、著者は二言語の借用と兩言語の構造上の親近性との相關に注目し、親近性の程度に應じて借用現象に様々なパターンのあるべきこと、從つてかゝるパターンの記述も一個の自足の問題となり得べきことを主張し (p. ix)、構造上の差違が大きければ大きい程、民衆的借用も困難となり、逆に構造上の親近性が近ければ近い程、音韻・形態・統辭の中での借用も容易となる、といふ假説を提供した (p. ix)。そしてその極端なる具體例として日本語に於ける中國語の借用は理論的にも興味があらう (p. ix) とて、問題が明確にされてゐる。第二の approach、即ち歴史的な approach として、かゝる構造上相容れざる言語を話す言語集團の間に於ける新しい語彙の導入といふことに就いて一方の言語集團が如何なる態度を取るかといふことが考へられる。今問題にしてゐる先史時代の社會、換言すれば、preliterate 即ち未だ文字を知らざる時代の社會に於ては、かやうな構造上の incompatibility を克伏する能力が弱いといへるであらう (p. ix)。一般に、

かゝる公式の適用によつて、preliterate な時代は literate 即ち文字を知る時代と區別される (p. ix) といふ。後の literate になつた時代に於ても中國語から導入した語は永い間外來語(漢語)として意識され、借用語 (loan) として民衆言語 (vernacular Japanese) には採り入れられなかつた。漢語はずつと aristocracy に獨占され、それは日常の社會生活の改善に努力した佛教の僧侶によつて大衆の間に浸透することも起つたが、全體としては多數の漢字を知らない大衆には殆ど縁の無いものであつて、原則として心ず漢字で示され、假名では書かれなかつた (p. ix)。そして、日本では preliterate な社會は literate な時代が始まつた後までも永く存続し、漢字の使用が關連する日本に於ける literacy (文字の知識) はローマ字が用ひられる社會に於ける literacy とは非常に異なるものであるといふこと (p. ix) に讀者の注意を喚起してゐる。

以上やゝ詳細に序論の内容を紹介したが、それは本論第五節と共に本書の主張が見られ、その中には贊不贊に拘らず多くの問題が提供されてゐるからである。

本論は主として Bernhard Karlgren 教授の Philology and Ancient China (一九二六年、オスロー刊) の古代日本語へ借用された中國語の借用として論ぜられてゐる例に就いて著者の蘊蓄を傾けて、その大部分が借用にあることが論證されてゐる。カルグレンの著述が選ばれてゐるのは、「彼がそれ以前の學者の缺陷と誤謬に氣付き、より科學的な、そして詳細な

方法を用ひてゐる」(p. 1)からである。検討された語例は全體で二十二例で、著者は之を、(I)疑もなく借用であるもの、(II)恐らく借用と考へられなものの十六例、(III)或は借用と考へられるものの四例に分けて、第三節(I)を、第三節(II)を、第四節(III)を、それぞれ論じてゐる。その具體的な例は次の如くである。

- (I) 1. sipo 'salt' = 鹽 (A. Ch. śap) 'marsh, swamp'
2. kapi-ko 'silkworm' = 蠶 (A. Ch. kap) 'butterfly'

(II) 1. a togu 'grind, polish' = 琢 (A. Ch. tāk) 'grind, polish'

- b. pagu 'hay' = 刍 (A. Ch. pāk) 'hay'
2. tuku 'build' = 築 (A. Ch. tjuk) 'build'
3. saku 'cleave' = 折 (A. Ch. śāk < śak) 'cleave'
4. kaki 'hedge' = 槲 (A. Ch. kek) 'partition, screen'
5. natu 'summer' = 蔭 (A. Ch. ŋziāt tāt) 'hot, heat'
6. yuka 'floor' = 閭 (A. Ch. fwak) 'threshold'
7. ipe 'house' = 邑 (A. Ch. iep) 'town, village'
8. sato 'village' = 菴 (A. Ch. śēt < śiāt) 'house'
9. sugi 'cryptomeria' = 松 (A. Ch. zung) 'pinus'
10. mugi 'wheat' = 麥 (A. Ch. mwek) 'wheat'
11. take 'bamboo' = 竹 (A. Ch. tjuk) 'bamboo'
12. pune 'vessel' = 盆 (A. Ch. b'uan) 'vessel'
13. kama 'pot' = 埴埴 (A. Ch. kām) 'pot'

書評

14. kama 'sickle' = 鎌 (A. Ch. kiam < kiam or g'iam
或は kiam or g'iam) 'sickle'

15. sine 'rice' = 稻 (A. Ch. śiān), rice (of a certain kind)

- (III) 1. kuni 'principality' = 郡 (A. Ch. g'uan) 'prefecture'

2. kinu 'silk stuff' = 絹 (A. Ch. kivan) 'silksstuff'
3. uma 'horse' = 馬 (A. Ch. ma) 'horse'
4. une 'plum tree' = 梅 (A. ch. muāt) 'plum tree'

〔カルルタレンの原文にはその一例掲げられてゐる。kuna 'bear' - 熊 (A. Ch. j'ung < g'jung < g'jum) 'bear'。〕
かゝこれは朝鮮語 kom を仲介とし、カルルタレンも日本語の借用問題とは關係がないとしてゐるので、本書では省かれてゐるであらう。尙本書には二三の誤植がある。琢・築・竹の中國中古音 (A. Ch.) は本書ではいつれもなとなつてゐるが、この誤植である。

上記各條に就いて著者の論述を紹介することは出来ないから、注意すべき點のみを述べるに留めたい。

一般にかういふ問題は確實に肯定したり、否定したりすることは中々困難である。といふのは中國語と日本語といふ音韻構造の甚しく異つた兩言語の間に借用が起つた場合、輸入された

中國の單語は日本語の音韻構造に適合するために甚しくその原形を歪曲してゐたであらうし、しかもその借用が孤立的に行はれた場合には音韻形態の面からその語を借用であるかないかを決定することは容易に出来ないからである。殊に中國の如き廣大な地域を包有してゐる所では方言の相違は現在以上に多岐であつたらうし、又その方言形は文字によつて表はされることなく消え去つたものも多いと思はれる。意味の面からいつても一般に語の意味の變化は全く偶然的な原因によつてその方向を定める爲に思はざる結果を招來するものであるから、借用に際して如何なる變化が齎されるかは端倪すべからざるものがある。従つてカルグレンの比定も原理的には肯定も否定も出來ないのであるが、カルグレンの最大の缺點は比定せられる各語を何らの吟味なしに、たゞ音・義の多少の類似性を以て比定を試みた點にある。尤もこれは *honest* としては避け難いことであるが、著者は之に對し日本語に關する限り追究出來るだけ追究しやうとしたのである。著者の試みた三段階の確實性はこの追究の結果である。著者は絶えず各語の文獻的徵證を求め、類縁の語との關係に留意し、能ふ限り語源に遡つて、借用の可能性に就いて論述を進めてゐる。又單に言語の中に留まらず、言語によつて表はされる事物の状態も忘れてゐない。例へば、(I) の 1 のシホの例では、カルグレンが之を溼の借用としたのは「鹽田」による製鹽法を媒介とするからであるが、かゝる製鹽法は古代日本では知られず、モシホ(藻鹽)といふ語に

よつて示される様に海濱に海水をかけて之を焼く方法が取られたのであり、シホは「鹽」を意味したと同時に「潮」をも意味し、むしろこの後者の意味が未だ製鹽の知られざる時代からのこの語の本義であつたとして、この借用の可能性を否定する。又カヒユは之をカヒ(蝶) + ヲとするカルグレンの説に對し、「蝶」の古語はカヒヒユであり、「蛾」の古語はヒユルであつて、カヒの如き語があつた證據はなく、それに養蠶に於て重要なのはこの蠶の幼蟲と繭であつて、成蟲ではないから、この蠶を「蝶ノ子」とするのは蓋然性が乏しい。之に反し萬葉集(卷十一、卷十二)に養子・養蠶とあつて、平安時代よりカフユと訓まれてゐて、この蠶を單にユといつた徵證があるとしてこの比定も否定してゐる。この二例はかなり明白な反證があるので、カルグレンの思い付きは到底承服し難い。著者の(I)にあげる所以である。

(II) の各例に就いても概ね同様な慎重な態度を以て採り上げられてゐる。この中には殆ど(I)に入れて差支へないと思はれるものもある。それは(II)の 1a 1b 2 3 の動詞の例である。著者も注意してゐる通り、形態論的にも甚しく異なる構造を持つ兩言語の間に、殊に動詞といふ範疇が明確でない中國語から明白に動詞を持つ日本語へ動詞の借用はかなり困難であらう(著者は *サ* の脚注にサウヅク等の例外的な例をあげてゐる)。しかも 1a トグ及び 1b ハグはト(砥)及びハ(刃)から派生した動詞と考へる可能性がある以上カルグレンの説は思ひ

付きの域を出ないであらう。4のカキも橘の如き漢語の借用とするより、動詞カク（又カクフ・カクム参照）からの派生と見るのが自然である。

次に植物の名稱として9 10 11 15があげられてゐるが、カルグレンの比定はそれぞれに問題がある。10 ムギをムクナギ（木）とするのは少くともギを「木」とすることは音・義共に承服し難い。それはこのギは甲類であるのに、キ（木）は乙類である。麥に木を添加するのは不自然である。15 シネは類縁のイネ・ヨネと共に考へねばならぬ。11 タケはこの植物は太古から日本にあるから、日本の住民がその固有の名稱を與へたといふ可能性がある。（この語は中國語の竹を考へるより、朝鮮語の²「竹」と比較すべきであらう。）9 スギに就いては著者は之を松の借用とするカルグレンの説に對し、意味の轉化に疑問を持ち、松も杉も太古から日本にあつたから、借用の蓋然性は少いとする。12 13 14は器具の名稱であるが、12 フネを「器」（*vessel*）とするカルグレンはこの英語に導かれてゐるのであるが、そして酒船といふ例も古事記に見られるが、これはやはり「船」を原義と考ふべきであらう。「船」に對する語はフネ以外にあつた證據は無い。14 カマは *pot* の意は新しい。古くはカマドと同義で、著者の意見によると、カマドはカ（香）ナマド（窓）の合成の可能性がある。カルグレンの比定はこの語の歴史を無視したものである。13 カマはむしろ中國語の形に問題がある。これが借用であるとするには中國語の原形に

書 評

bed といふ形が立證されねばならない。6 7 8は家屋乃至集落に關するものであるが、6は意味の相違からカルグレン自身もあまり自信がなさうである。7 8は共に日本の社會に深く根ざす觀念を示すもので、7 イへは單なる *house* でなく、むしろ *home* に近いし（原義は著者によれば、*screen for sleeping*）、8 サトも單なる「村」ではなく、故郷としての村である。かゝる語が借用される蓋然性はこれらが *native origin* であるとする蓋然性より少い。カルグレンがイへを邑から導き、サトを室から導くのはあまりに飛躍があり過ぎる、5 ナツが熱の借用とするのは少くとも説明を要する。これはむしろ朝鮮語の *natum* と比較すべきであるといふ工合にこの十六例は借用と認むべき根據が明白でない。しかしこれらは（I）に於けるが如く否定する根據を積極的に出すことも必ずしも容易ではない。著者が（II）に總括した所以であらう。

（III）はカルグレンの創見ではなく、1 2はバーカーが、3 4はチェムバレンが提唱したものである。著者はこれらに對し否定的態度は採らない。しかし1 クニは神名國常立神に現れるから疑問があるが、この神名が新しく成立したもので、クニは依然中國語起源であるとしても、直接中國語から借用したものでなく、朝鮮を仲介してゐるか否かといふ問題がある。それは漢の朝鮮植民地が郡と呼ばれたからである。（因みに行政關係の語が朝鮮から借用された可能性に就いては例へば、ユホリ（郡）は *Yeh-pi* 「大イナル集落」といふ朝鮮の言語からの

借用である。2 キヌの借用に就いても著者は新井白石（東雅）の説に従つて終局には中國語起源であつても、朝鮮の或る方言に於て訛つた形が日本に傳へられたものとしてゐる。同様の關係をウマに就いても考へ、この場合には朝鮮とは明言してゐないが、或る中間的なものを考へて、直接の中國語起源ではないとする。ウメに就いては烏梅を原形とし、藥用の梅の名が樹名となつたとしてゐる。いづれもカルグレンの様な素朴な比定に満足せず、その多くを朝鮮を媒介とする借用で、直接の借用といふ事に對しては多分に懷疑的である。但しウマ、ウメのウに對するカルグレンの説明、即ち古代中國語の頭音 *h* が *ph* といふ *protruded lips* で發音されたために生じたといふ説明には何も觸れてゐない。恐らくこの説明は著者には受け入れ難いので無視したものと思はれる。

尙クニの説明に際し、カルグレンが字音導入以前に中國語を日本語に借用した場合、單・閉音節語を入れるに際し、寄生母音を附加したが、その母音は *a i u e o* の間を動搖した、例へば *kak* と *u* の音節を入れる時には *kaka, kaki, kakui, kake, kako* の *u* づれにもなり得たといふ説に對して、漢語導入に於て *sound-substitution* の二つの *pattern* があることを指摘してゐるのは注目すべきであらう。一は博士 *kaku-se*、近衛 *kono-ve*、燈心 *tou-sim*、雙六 *sugu-toku* の如く原音の母音と同じ母音を附加する場合と、二は原音で *u* に終る場合は之を *u* と受ける場合、例、苦丹 *ku-tani*、紫苑 *si-yoni*、牽牛子 *ke-*

ni-son の如き場合とがあり、動搖説が精密を缺く點を指摘してゐる。クニはこの後のパターンに應ずるので、この點は問題がない。

以上の様に從來中國語からの借用と考へられて來た幾つかの例の多くは借用と考へ難いものであり、その可能性の考へられるものも多くは直接の借用ではなく、朝鮮といふ仲介を経ての借用であるといふ結果に到達した。そこで第五説に於て、中國語からの借用が何故に古代日本に於てかくも稀であるかを論ずることになる。第五節の論述を要約すると、大體二つの議論になる。第一は借用が起つたとしてもそれを辨別することが困難であること、第二は借用稀少の理由である。第一としては日本語の音韻組織がその各音韻に於てもその結合の型に於ても非常に *simple* であることがあげられる。そのため比較の手がかりとして十分な識別を與へることが出来ない。殊に完全に日本語の中に融けこんで了ふと、その起源を思ひ起こすことが困難になる。新しい歐羅巴語からの借用でも、例へば *serge* がセルになり、*devil* がセビロになると、殆ど借用の意識を失つて了つてゐる。又後世唐音と共に輸入された漢語が漢音によつて訓まれる様になつた様に、先史の借用 (*popular loan*) にもその起源がまだ意識されてゐた場合に、(そしてそれが漢字で書き得る場合には) 後になつて標準の字音によつて置き換へられて了つたといふ事もあり得るとする。勿論これだけで問題は解決

管 評

しはしない。若し實際借用が起こつたとすれば、何らかの形でもつと多くの迹を見出すことが出来た筈である。のみならず上代の日本には多くの中國人の歸化人がゐた。その中には中國人でも朝鮮を経由したものも多かつたであらうが、中國の歸化人は朝鮮からの歸化人と共に記録を司つてゐたのである。にも拘らず、借用が非常に少いのは何か理由がある筈である。そこで著者は第二の、そして本書の主題である所の借用困難の理由を次の如くに述べる。「古代朝鮮の言語分布は知られなくてはならないが、當時行はれてゐた諸言語の相互關係に就ては何も知られてゐないし、各言語の性質についても殆ど知られてゐない。しかし古代朝鮮の南部に古代日本語によく似た特徴を持つ言語が行はれてゐて、文化の導入に由來する新しい術語や觀念はこの古代朝鮮の言語に據つてゐたと考へられる。一方、古代朝鮮ではユーラシア文化が古くから北方から流れ込んでゐて、日本に新しい語彙を提供したと考へられる朝鮮でも中國の言語影響はその時代に於てやはり微弱であつたであらう。これは決してユーラシア文化が文化的に中國のそれに勝つてゐるといふことではない。にも拘らず、名詞の場合だけでも、二つの構造上相容れない言語間に借用が起ることが如何に困難であるかといふことがいへるのである。この見解は琉球語からも間接に證明される。琉球はその歴史を通じて政治的には中國と日本の雙方の勢力にあつた。しかし借用された語は常に日本語であつた。」(p. 26)

この結論は示唆に富む。古代朝鮮半島の言語狀況は魏志の東夷傳の記事によつてその片鱗を伺ふに過ぎず、それによれば、扶餘・高句麗・沃沮・穢貊つまり貊族の間には言語の類似が言及されてゐるが、韓族の言語、倭人の言語との間には何事も説かれてゐない。しかも韓族の言語も新羅の言語が後世朝鮮語になつたことだけは明かであるが、韓族の言語が一つのものであつたが、又種々の言語があつたかも知れない。著者が南部朝鮮に日本語に似た言語があつたといふのは何を指してゐるか判らないが、倭人が南端にゐた事は東夷傳に記録されてゐる通りであり、更に朝鮮の古地名に(必ずしも南部に限られない)日本語で解釋し得るものが若干存する所から朝鮮に日本語に似た言語があつた可能性は十分ある。又朝鮮は直接中國文化を被つた所であるが、この朝鮮の言語の一の發展である後世の朝鮮語にも所謂「漢語」以前の中國語からの借用で明白な語例は案外稀少である。勿論朝鮮語の場合はその歴史の研究が極めて不完全であり、綿密な、忍耐強い調査の結果では借用例をずっと多く發見し得るかも知れない。しかし一般的に言つて日本語と同様、後世の漢語の氾濫に比して、古い借用語は非常に限られてゐた様に思はれる。尤も現在の朝鮮語は新羅語の後裔であり、新羅語と日本へ中國文化を移植した媒介者の百濟の言語とが必ずしも同一言語の方言であるとは斷定出来ない。不幸にして百濟語の實體は殆ど判らないので、借用がどの位行はれたか全く不明である。

かくて著者は先史日本語に於ける借用の稀少を兩言語の構造上の相違とそれを克伏する能力の微弱に歸する。この假設は面白い。しかし如何にして構造の相違が借用を阻むのかといふ疑問が自然に生じて来る。恐らく著者にはその疑問に答へる用意があり、その理論的展開が期待されるが、それはそれ自體大きな課題であるから、本書では問題提起に止めたのであらう。又言語構造より生活形態の差違、或いは文化程度の懸隔が直接の借用を困難ならしめたといふ可能性も考へられるのではないか。或ひは著者も指摘してゐる如く中國文化との接觸が朝鮮と

いふ媒介を経てゐた爲、朝鮮で一旦濾過され、翻譯された結果、案外直接の借用語が少いといふ事も考へられさうである。又その基因がこれらの言語外の事情になく、著者の説の如く言語構造にあるとすれば、この假設の驗證として日本語・朝鮮語の如き多音節・膠着語的言語に及ぼした中國語の影響と安南語の如き單音節・孤立語的言語に及ぼした中國語の影響を比較するといふことも意味があるであらう。などと考へて來ると、著者の問題提起は種々の方面に發展する可能性を含み、その意味でも本書は注目してよい。